



固定通信事業者の急務FMC グローバルに問われる新収益モデル

通信オペレーター各社が次々と、トランスポート層のIP化を表明している。

そこで現在、2007年に実現するIP網を活かすための新たなビジネスモデルが求められている。

サービスプラットフォームとしてのIMS、固定系と移動系を融合するFMCといった
新たな枠組みの可能性や将来像について、通信業界をよく知る二人が語り合う。

トランスポートIP化が進展 既存サービスの継続が重要になる

現在、NGN、IMS、FMCというキーワードが、固定系、移動系を問わず通信業界全体を席卷しています。すでにNGNの端緒というべきコアネットワークのオールIP化は、2004年7月のBTに続きNTT、KDDIが表明しているところです。この流れを皆さんはどうぞご覧になっていますか。

吉川 私のようなもともと交換機屋の視点で見ますと、電話交換100年の歴史が変わるということです。交換機という専用システムが、IPという汎用プラットフォームに切り替わりつつあります。音声主流のトラフィックを回線交換という仕組みで処理していたものが、データのみならず音声、画像、映像などのメディア情報をパケット化します。パケット交換という技術で、すべての情報を送受信、配信するという、文字通りオールIPの世界が実現しようとしています。シグナリングのパケット化の波が、コントロールプレーンにとどまらず、ユーザプレーンにだんだん押し寄せているところです。

伊藤 NGNやFMCについてはまだ、いろいろな人がそれぞれの似姿を描いている段階です。間違いのない流れは、トランスポートをIP化するということ。ITU-T（国際電気通信連合・電気通信標準化部門）で04年からNGNプロジェクト立ち上がり、国際的なコンセンサスが整いつつあります。根底にあるのがトランスポートのIP化であり、そのうえでNGN論議が活発になって

きたところでしょう。IPトランスポートを介して将来つながってくるであろうさまざまなアクセス系、さまざまなサービス、さまざまな端末。そこで必要な要素を全体で考えましようという動きです。ただし、具体的なITU-Tの動きと事業者の動きの接点は、IPトランスポートというところの一点にとどまっているのが現状でしょう。

吉川 通信オペレーターサイドの動向の典型がVoIPの導入です。専用の高価な交換機ではなく、比較的安価な汎用IPルーターで網を構築できるようになります。そこで「装置を安く導入したのだからサービスも安く提供しましょう」という流れが出てきています。日本ではまず固定系事業者が対応に迫られています。

伊藤 そこで考えなくてはならないのは、固定系事業者が中継系をIP化するなかで、サービスのマイグレーションをいかに進めるかという問題です。ITUなどの国際標準はIPトランスポートサービス・プラットフォームに関してであり、実サービスに落とし込んでいないのが現状です。

オペレーターやベンダーは早急に、その間をきちんとは補完するためのパスを考えなくてはなりません。たとえばNGNによって中継系のIP化を標準化しても、一般ユーザーから見た場合、末端にある電話機は昔ながらの黒電話です。では、着信、転送、フリーダイヤルといった「いまある基本サービスをどうIP上で実現するか」というステップが必要になります。

その次に初めて、「新しいサービスをどうするか」という視点に移ることができます。いまの議論を見る限